

『枕草子』「大納言殿まゐり給て文のことなど奏し給に……」の段の解釈

——『枕草子』に刻まれる時間の二重構造について——

飯島裕三

はじめに

『枕草子』という作品がなぜ世に現われたのかというヒントは、作品の最後の跋文らしきもののなかに見出せる。

この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとする、とおもひて、つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを、あひなう、人のためにびんなきいひ過しもしつべき所ぐもあれば、よう隠しをきたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

(松尾聰・永井和子 校注・訳「日本古典文学全集」『枕草子』・小学館・一九九七年版・四六七頁)

この三巻本の本文を作者の本音を表現したものと信じるならば、「自分の目に映り心に思うことを書き集めた雑文を、誰も関心を持たないと思うし、他人を傷つける箇所もあるので秘匿してきた。それが思いがけなくも外部に漏れ出てしまった」のだという。しかも能因本の跋文には、

権中将のいまだ伊勢の上と聞えし時におはしたるに、端の方なる畳押し出でてすゑたてまつりしに、にくき物とは、草子ながら乗りて出でにけり。まどひて取らんとするほどに、長やかにさし出でむかひなつきもかたはなるも思ふに、「けしきの物かな」とて、取りてやがて持ておはしにしより、ありきはじめて、済政の式部の君など、つぎつぎ聞きてありきそめて、かく笑はるるなめりかしと。

(松尾聰・永井和子 校注・訳「日本古典文学全集」『枕草子』・小学館・昭和49年版・四六八頁)

という一文があり、これも作者の思いを書き表わしたものとするとすれば、その漏出の経緯にはむしろ自分から他人に見てもらおうとする意志さえ読み取れる。しかも作品中には中宮や中関白家の人々との機知あふれる交流や、他人とは異なる感覚で切り取っ

た世界の諸相が描かれ、そういう恵まれた立場や自分の独特な才能を積極的に第三者に知らしめ、羨ましがられることを喜びと感じていたに違いないと思われる。また渡辺実氏は次のように述べている。

「春は曙よ」という発言は、いま何を問題にしているかを諒解し合っている、仲間の存在を前提とするであろう。書くことは料理の注文とは違い、孤独な営為であるはずだが、清少納言の場合、ひとり筆を執る時でも、仲間との通じ合いが、自覚する必要もない前提としてはたらくものようなのである。

（渡辺実 校注「新日本古典文学大系」『枕草子』岩波書店・二頁）

物語ではなく、随想とよばれるような形態がとられたにしても、そこには清少納言を取り巻く仲間の存在が前提とされていたというのである。しかし私は渡辺氏の考え方ではまだ『枕草子』の本質は捕まえ切れていないと考える。『枕草子』という作品には、この国で最初に読者を意識し、しかもその読者からの羨望の眼差しを向けられることを少しも厭わない、強い自尊心の働いた随想的作品であったと捉えている。平安時代中期に存在した一人の日本人の感性が今日これほど評価される理由は、作者の強烈な個性によって照射される世界の様相やその感覚が、我々の考える「古典」という枠組みからはみ出し、現代人の心に共鳴が起るからではないかと思う。そしていわゆる日記的な章段や「ものはづけ」の段に色濃く作者の感性は表出されている。先に挙げた跋文の続きに、

宮の御前に、内の大臣の奉らせたまへりける草子を、「これに何を書かまし」と、「うえの御前には、史記といふ文をなむ、一部書かせたまふなり。古今をや書かまし」などのたまはせしを、「これ給ひて、枕にしはべらばや」と啓せしかば、「さらば、得よ」とて給はせたりしを、持ちて、里にまかり出でて、御前わたりの恋しく思ひ出でらるる事あやしきを、こじや何やと、つきせずおほかる料紙を書きつくさむとせしほどに、いとど物おほえぬ事のみぞおほかるや。

（『日本古典文学全集』『枕草子』・一九九七年版・四六六頁）

ここに記される紙の入手のいきさつから推定すれば、その紙に何を書くかは清少納言の自由にまかされていたように記されるが、実はそこに書かれるべきものは初めから決められていたというべきである。それはまず中宮定子の歎心を得るもの、そして中関白家と命運を共にし、その盛衰に一喜一憂する人々をも魅了し、いくらかでも厳しい現実を忘れられる様な内容でなければなら

ない。この紙の束にはそういうことが書かれなくてはならない約束だったのだ。そして清少納言はその目的を果たそうとして、自分が道化になることをも覚悟の上で、耳目を驚かすような内容をあえて書き記すことになった。紫式部は清少納言について次のような批評を加えている。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書き散らしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすろなるをりも、ものあはれにすすみ、をかきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにははべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

（中野幸一校注・訳「日本古典文学全集」『紫式部日記』一三八頁）

さんざんな言いようであるが、しかしこのような批判が出ることは清少納言にとっては覚悟の上ではなかったか。何故なら彼女の発言は当時の常識的な感覚を持った人から見れば、当然笑われてしかるべき類のものであったからである。たとえば最初の「春は曙」という章段からして当時の人々の思い込みを覆そうと意図したものであった。現代人の目から見れば称賛されるような彼女の発想も、当時の人々にとっては嘲笑すべき非常識であつたろう。しかしそうして人の目を引くことが彼女の役目であつたのだ。ではどうして清少納言はこのような行動をとったのかについては、彼女の立場、置かれていた環境を再確認しなければ明らかにならない。

彼女が宮仕えを始めたと考えられる正暦四年（九九三）以降の中関白家を見ると、その年の三月には道隆の次女原子が東宮に入内、四月には道隆が関白となり、翌五年には華やかな諸行事がうち続く中で長男の伊周が八月に内大臣になっている。だが中関白家はその栄華が極まろうとしたさなかに、十一月道隆が病に倒れ、翌長徳元年（九九五）四月には薨去するという、山の頂から谷の底へ転落するような無常な現実に直面することになった。しかも事態はこれにとどまらず、長徳二年（九九六）には花山院に対する不敬の罪で伊周は大宰府へ、弟隆家は出雲へそれぞれ配流となり、ために定子は落飾するという不孝の追い打ちをかけられる事になる。このように激変する世の中に中関白家につながる人々は茫然自失の態であつたに違いない。清少納言が中関白家の女房として『枕草子』の執筆を開始した時期には、一族の衰運は目を覆うばかりの惨状を呈していたのである。だが従来から言及されている通り、清少納言は目のまゝに展開する中関白家の悲惨な現実を『枕草子』の中には持ち込まず、むしろそのような現実を忘れさせるようにつけての一族の華やいだ繁栄を再現する。それは過ぎ去った栄華を再現することで、厳しく辛

いこの世を一瞬でも忘れてもらおうとする清少納言のけなげな「行為」ではなかったか。つまりは『枕草子』という作品は中宮定子を核として、その過酷な現実にめげそうになる人々に、中関白家の一員としての矜持を保ち、結束を呼びかける作品であったのではないか。そうであればこの作品は人々の目につくことを避けるものではなく、むしろ表に出ることを要求する作品であった。だがそれは『紫式部日記』に書かれるような批判に晒されることにもなったのだが。前述の渡辺氏は、

畢竟、『枕草子』は、ひとりになることの意味がよくわからなかった作者による、みんなの文学なのである。中宮定子の許に召された女房たちが、中関白家の醸し出す雰囲気主導されて同化し合い、主従一如のごとき空気が作り出されていたのであろう。その中で、宮仕え女房集団のリーダー格として振舞ったのが清少納言であって、その述作は、散文作者の孤独な文章行為の軌跡と見るべきではなくて、仲間みんなに支えられた文章行為の軌跡と見るべきものだと思う。

(前掲書・三八九頁)

渡辺氏の言によれば『枕草子』の作者には孤独感が欠落していた。常に周囲と同化する中で作品は生みだされたという。しかしこの考え方では先に述べた中関白家の置かれた当時の状況を認識し、清少納言の心理への踏み込みが甘いと言わざるを得ない。この時期の中関白家の凋落は、彼女の中に深い傷を負わせ、屈折した思いを醸成させていたに違いない。『枕草子』を読むという作業は、揺れ動く時代の中で、人から嘲られようと大切な人を守るという強い信念の存在に気付き、それを掘り起こそうとする意識がない限り作者の真意を読み損なう可能性が高い。そしてその真意は笑いに紛らわされるような何でもない記述の中に隠されていることがある。この小論ではその真意を掘り起こす作業の足場づくりであり、従来見逃されてきた作者の意図を焙り出そうとする試みである。

一 「大納言殿まゐり給て、文のことなど奏し給に」の段の背景にあるもの

次の文は高等学校の古文教材としても頻繁に取り上げられる『枕草子』の章段である。この段について解析を加え、その背景にある「ある感覚」を焙り出してみたい。

大納言殿まゐり給て、文のことなど奏し給に、例の、夜いたくふけぬれば、御前なる人ぐく一人二人づゝうせて、御屏風

みき丁のうしろなどにみなかくれふしぬれば、①只ひとり、ねぶたきを念じてさぶらふに、②「丑四つ」と奏すなり。「あけ侍ぬなり」とひとりごつを、大納言殿「いまさらに、なおおほとのごもりおはしましそ」とて、ぬべき物ともおほいたらぬを、うたてなにしにさ申しつらん、と思へど、又ひとのあらばこそはまぎれも臥さめ。

上の御前の、柱によりかゝらせ給て、すこしねぶらせ給を、「かれ見たてまつらせ給へ。いまはあけぬるに、かうおほとのごもるべきかは」と申させ給へば、「げに」など宮の御前にも笑ひきこえさせ給もしらせ給はぬほどに、をさめが童の、にはとりをとらへ持てきて、「あしたに里へ持ていかん」といひて、かくしおきたりける、いかゞしけん、犬みつけておいければ、廊のまきに逃げいりて、おそろしう鳴きの、しるに、みな人おきなどしぬなり。上もうちおどろかせ給て、「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせ給に、大納言殿の「声、明王のねぶりをおどろかす」といふことを、たかううちいだし給へる、めでたうをかしきに、たゞ人のねぶたかりつる目もいとおほきになりぬ。「いみじきをりのことかな」と、上も宮も興ぜさせ給。猶かゝることこそめでたけれ。

又の夜は、夜のおとゞにまゐらせ給ぬ。夜中ばかりに、廊にいで、人よべば、「下る、か。いでおくらん」との給へば、裳、唐衣は屏風にうちかけていくに、月のいみじうあかく、御直衣のいと白うみゆるに、指貫を長うふみしだきて、袖をひかへて、「たふるな」といひて、おはするまゝに、「遊子、猶残の月に行」と誦し給へる、又いみじうめでたし。

「かやうの事めで給」とては笑ひ給へど、いかでか、猶をかしきものをば。

（『日本古典文学全集』枕草子』二九三段「大納言殿まゐりたまひて」四四六頁 数字は整理のため筆者が記入した。）

従来この章段のテーマは、一条天皇、中宮定子の面前で、伊周が披歴した当意即妙の漢学の素養や、自房に下ろうとする清少納言を送りがてら、見事な漢学の素養を示す伊周を称賛した段というのが一般的な見解である。伊周の漢学の才を褒め称える記述は「御仏名のまたの日」（七七段）にも見えるので、一見すれば清少納言の伊周に対する憧憬譚の一つといえそうである。ここで注意すべきことは、現在の研究では清少納言が宮仕えを始めたのは正暦四年の初春、または初冬と考えられている。この記事は伊周が大納言任官中（正暦三年八月二十八日～正暦五年八月二十八日）の出来事であるから、正暦四年の初冬に宮仕えを始めたと考えたと、この内容は正暦五年五月六日の夏至から六月二十二日の立秋までの間のこととなる。つまり清少納言が宮仕えを始めて長くて十箇月、短ければせいぜい六箇月の頃の出来事ということになる。そこで冒頭個所の記述「例の、夜いたくふけぬれば、御前なる人ぐく一人二人づ、うせて、御屏風みき丁うしろなどにみなかくれふしぬれば、只ひとり、ねぶたきを念じてさぶらふに」という記述に疑問が生じる。半年そこそこの宮仕え人に過ぎないのに「例の」という発言は不自然ではないかという

ものである。このことに關して、萩谷氏は次のように解釈している。

正暦五年夏といえ、清少納言が出仕して、まだ一年に満たない。夜が更けて、他の女房が要領よく、そこここに隠れ臥しても、ひとり我慢して起きている事情も、新参なればこそとうなづかれる。

(萩谷朴校注 新潮日本古典集成『枕草子』下 二四六頁頭注・傍線筆者)

また松尾聡・永井和子の両氏も「作者の新参意識のために、寝ずに出仕していたころ、」と萩谷氏と同様の考え方を示している(校注・訳 日本古典文学全集『枕草子』四四八頁・頭注)ところから、このような考え方が一般的な解釈と思つてよいだろう。だが本当に清少納言は新参のためにその場に取り残されてしまったのだろうか。本文には「御屏風みき丁のうしろなどにみなかくれふしぬれば、只ひとり、ねぶたきを念じてさぶらふに」と記されてあるのだから、彼女が新参意識を持ち、一瞬でもはやくその場を逃れ去りたいと思うような心境であつたなら、むしろ他の女房に同調して、几帳の後ろに隠れ臥すほうが自然な氣がする。「念じてさぶらふ」つまり「我慢してお仕えする」という書き方は、むしろ作者のその場に踏みとどまろうとする意志を読み取るべきではないか。また清少納言が自房に下がる際、伊周に付き添われる場面では、作者が明るい月の光の中でも緊張することもなく、極めて自然にふるまっているように描かれていて、到底新参の女房とは思われないものが感じられる。『栄華物語』によれば伊周という人物は「見奉れば御年は廿二三ばかりにて、御かたちとのほり、ふとりきよげに、色含まことに白くめでたし。かの光源氏もかくや有けむと見奉る。」(松村博『栄華物語全注釈』二「浦浦の別」三九頁)とあるような、当時理想的な貴族として人々に注目されていたようで、あまりにも冷静な作者の姿には、すでに長年内裏生活に馴れ親しんだような風格さえ漂う。『紫式部日記』などをみると、彰子に仕えてから三年目くらいに式部は日記を書き始めているが、それくらいの経験がなければ中宮の出産の場面における人々の様子を、あれほど克明には描写できないのではなからうか。そう考えるとこの章段は宮仕え後何年か経って、昔を思い起こして再構成された章段ではないかと考えられる。つまりそこに作者の隠された意図や、そのための虚構が含まれていることを前提とした解釈が要求されるということである。

ところで②の個所で清少納言は何故「丑四つ」と聞いて、「あけ侍ぬなり」と言つたのであろうか。またここで「独り言」といいながらも伊周にはこの言葉がはつきりと聞こえていたことにも注目しなければならない。実はこの一節を理解するには当時の時刻制度の理解が前提となる。平安時代においては一日の境界の時刻が、現在のように午前零時ではなく、別の考えが存在した。それは平安時代には定時法(制度時報)と不定時法(自然時報)の二種類の時刻制度が併存していたのである。そのため出

来事の起きた日時を記録する場合に不都合を生じることがあったのだが、定時法では夜明けに最も近く、かつ混乱が起らない丑刻の境で日付けを変えることにしていた。このことは日月蝕の起こった記事の中で確認され、『三代実録』等の中にも記録がある。そして橋本万平氏は『枕草子』のこの部分の記述に関して次のように意見を述べられている。

日蝕、月蝕は宮中行事の停止等に関連するので、それがいつ起きたかは極めて重要な事なのであった。即ちこの時代の時刻制度は、「延喜式」に見られるものであるから、丑四つは現代時刻で午前二時半頃に相当している。その一刻前がいわゆる丑三つで真夜中の午前二時である。如何に明けやすい夏であっても、丑四つは真暗であり、夜明けまでかなりの時間がある。それにあけ侍りぬなりでは説明がつかない言葉である。これも丑四刻で昨日が終わり、次の刻の寅の一刻から新しい日が始まるという意味で、あけ侍りぬを使用したと考ええると、了解することが出来る。

（橋本万平『日本の時刻制度』一一三頁）

定時法（時計時間）は時刻を正確に計測できる機器（漏刻）を備えた宮中という特殊な環境でのみ存在し、適用される時刻制度である。つまり清少納言は、一般社会で通用していた不定時法（自然時間）ではなく、宮中という狭い空間でのみ使用される定時法を念頭に置き、「丑四つ」という言葉に対して、「『あけ侍りぬなり』とひとり」ごとをつぶやいたのである。実はこの独り言にこの章段における清少納言の思いが集約されているのではないだろうか。それは宮中が不定時法によって運行される一般社会とは隔絶された空間であることを伊周に再認識させたのである。もとより伊周も自分の邸に帰ればそこは不定時によって支配される空間である。だから清少納言の独り言によって自分の置かれた場所を再認識したのである。その発言が帝や中宮定子、特に伊周という当時最高の貴人に新参者の自分を認知させる「お手柄」となったのである。宮廷という場に刻まれる時刻の特殊性に言及することで、帝に対する伊周の発言に力を添え、かつ帝・中宮・伊周の置かれた特別な立場を言い表わすこの「ひとりごと」は、必ず伊周の耳に届かなければならないものだった。そういう背景に気付かなければこの章段の理解は不完全なのである。そして「たゞ人のねぶたかりつる目もいとおほきになりぬ」という一文は、宮中という特別な時間の流れる場であり、かつ清少納言自身もその中に身を置く栄光を語ったものである。定時法という時刻制度に包まれる内裏は、正確な時刻制度によって二十四時間統御された空間で、宮廷に関与する人以外には窺い知れない特殊な場であるが、政権を維持する公卿たちでさえもひとたび宮中を離れ、自邸に戻れば不定時法という感覚的な時間に支配されるのであった。これを言い換えれば当時の社会には二つの異なる時空が存在していたのだと言えようか。一つは科学的な計測機器によって律せられる公の空間。もう一つは、「日の出」、

「日の入り」を基とする大まかな時間感覚に支配される私的な空間。清少納言は、伊周とのエピソードを記すことで、宮廷を支配する定時法という時刻制度を人々に再確認させることをも目論んだのである。そのことは自分たちの置かれている宮中という空間の高貴さを証明する重要な要素だと思ひ込んでいた節が見られる。このことをより詳しく次章で検証してみよう。

二 『枕草子』に表れる時間の重層感覚

『枕草子』には前節でも述べた以外に次のような時刻に関連する記事が見出される。例えば、

故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大祓といふ事にて、宮の出でさせたまふべきを、職の御曹司を方あしとて、官の司の朝所にわたらせたまへり。……

時司などは、ただかたはらにて、鼓の音も例には似ずぞ聞ゆるをゆかしがりて、若き人々二十人ばかりそなたに行きて、梯（はし）より高き屋にのぼりたるを、これより見上ぐれば、ある限り薄鈍の裳、唐衣、同じ色の単襲、紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそえ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。

（小学館『日本古典文学全集『枕草子』・一五五段「故殿の御服のころ」二八二頁）

ここで「故殿」と言っているのは長徳元年（九九五）四月十日に亡くなった関白道隆のことで、ここはその二ヶ月後の六月の記事である。中宮定子は父の服喪中ということで、神事である「大祓」には内裏から退出しなければならなかったが、退出先と考えていた「職の御曹司」の方角が悪く、「官の司の朝所（あいたどころ）」に移るようになった。ところがそのすぐ傍に、「時司」つまり陰陽寮に所属する時刻を管理する役所があった。中宮に随行した女房たちは中関白家の中核を喪い、悲しみに打ちひしがれていたことであろう。そんな悲しみを一時癒そうとするかのように女房達は時を知らせるための高樓に登った。その姿を見上げて「ある限り薄鈍の裳、唐衣、同じ色の単襲、紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそえ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる」と清少納言は感想をもらす。あまりの華麗な姿に一時現実の辛さも癒えるばかりであった。ここは道隆の薨去二ヶ月後という時点と、女房達は本来足を踏み入れないような「時司」という、日時と場所との遭遇が逆に一層の寂しさと悲しみを呼び起こす場面となっている。そしてここに漏刻（水時計）が設置してあり、宮中の日常生活と諸行事の統御されていく時刻が生みだされる基点でもあった。漏刻自体の記述に筆が及んでいないのがきわめて残念だが、しかし偶然にしても平

安時代の「時司」の様子をここまで記録した仮名作品は他に存在しない。定時法という時刻制度に人一倍の関心があった清少納言だからこそここまで書き残してくれたのではないかと思う。ところで、清少納言は二つの時刻制度をどのように受け止めていたのか。ここ以外に『枕草子』に記される時刻に関する記述を抜き出し、それらが定時法によるものか不定時法によっているものかを場面ごとに判定しつつ、作者が二つの時刻制度に対してどのような思いを抱いていたのかを探ってみよう。

1 未の時ばかりに、「筵道（貴人の通行時に道に敷く薄縁）まゐる」など言ふほどもなくうちそよめきて（帝が）入らせたまへば、
（同書・一〇〇段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」二〇六頁 傍線筆者、以下同）

この段は中宮定子のいる後宮の登華殿でことが描かれている。帝（一条天皇）が「入らせたま」うて、お二人がこれから御帳のなかに入られるところである。内裏の中でのことであり、当然定時法による時刻による表現のはずなのに「ばかり」という副助詞が使われて時刻がばかされて表現されている理由は、帝・中宮という公式人としての行動から離れ、男と女としての私的な場面だからである。時司の打ち鳴らす鉦鼓の鐘による定時法に裏打ちされているが、公的な場と・私的な場面には流れる時間も変化するると当時の人々には受け取られていたことは、時刻制度を考える上で興味深いものがある。

2 わびしげに見ゆるもの、六、七月の午未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけてゆるがし行く者。

（同書・一一八段「わびしげに見ゆるもの」二二八頁）

ここは高貴な場から隔絶した俗世での見聞であり、当然民間で通行している不定時法を用いた記述と考えるべきであろう。それが「午未の時ばかり」というおおまかな描写につながり、「きたなげなる車にえせ牛」を描く時の作者の感覚の根底にある時間感覚といえよう。

3 頭弁の職にまゐりたまひて、物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。
（同書・一三〇段「頭弁の、職にまゐりたまひて」二四四頁）

「頭弁」とは藤原行成のことである。「職」とは「職御曹司」のことで、明日は主上が物忌なので参内しなければならない。「丑

になりなばあしかりなむ」と言うのは、二九三段「大納言殿まゐりたまひて」で述べたように、丑と寅の刻の境で当時は日付が変わるので寅の刻になってしまふと翌日になってしまうからである。つまり「明日は清涼殿に詰めなければならぬから、今日中に宮中に参上した」ということである。才人行成とのやりとりは、二九三段での伊周との会話のように、清少納言にとって誇らしい一時であつたに違いない。その時には宮中での特別な時間の流れが背景にあり、登場人物が当代一流のすぐれた男性貴族という共通した設定になっていることに気付かされる。そして行成はここでは私人ではなく一官僚として宮中に仕えるのであり、その時には公的な時刻のなかでの行動として認識されることになる。

4 二月の午の日の暁に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりにつけり。やうやく暑くさへなりて、まことにわびしくて「など、かからでよき日もあらむものを、何しに詣でつらむ」とまで、涙も落ちてやすみ困ずるに、四十余ばかりなる女の、壺装束などにはあらで、ただ引きはこえたるが、「まろは七度詣でしはべるぞ。三度は詣でぬ。いま四度はことにもあらず。まだ未に下向しぬべし。」と、道に会ひたる人にうちいひて……

（同書・一五二段「うらやましげなるもの」二七七頁）

ここは伏見稻荷に参詣した時のことを記したものである。清少納言は当日の氣候の状態や体力の関係で、やつとの思いで坂を登っていくのに、あまり身分の高くないともわれる四〇歳がらみの女が軽々と登坂して行くのを見て、うらやましいと感じた場面である。涙も出そうなほど辛い状況は彼女にとっては俗悪な現実の世界であり、そこでは世俗の「巳の時ばかり」という時間が流れる。また後の「未」は女の自慢げに聞こえる発言であり、この不快なひとときに相応しい時刻は当然不定時法によるものである。未の間に四度の参詣を成し遂げるといふ「四十余ばかりなる女」の言葉を「うらやましげなるもの」のなかに入れてはいるが、作者と同年輩かそれ以上の歳と思われるこの女に対し作者が下賤のものという認識を強く持っていたことは疑えない。階層と時刻制度というものの関連を知る上で興味深い。

5 「寅の時になむわたらせたまふべかなる。などか今までまゐりたまはざりつる。扇持たせて、求めきこゆる人ありつ」と告ぐ。さて、まことに寅の時かと、装束きたちてあるに、明け果て、日もさし出でぬ。

（同書・二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」四〇五頁）

この場面は中宮が積善寺に御経供養のために渡られる時のことを描いた一節である。ただここは宮中ではなく、関白道隆の邸である二条院でのことであり、日付の変わる「寅の時」に中宮が二条院から寺に向けて出発するというのである。二条院とは、道隆が中宮のために東三条院の東の町に造営した新邸であるから、内裏から距離もあるので寅の時を知らせる鐘の音が聞こえたかどうか定かではない。しかし「寅の時」と限定している以上何らかの方法によって内裏の正確な時刻を知る事が出来たと思われる。ここは行事の内容からもまたその中心人物（関白道隆）の立場からも、定時法と考えるべき場面になるが、問題は定時法による時刻を知る手段がどのようなものであったのか、それが明らかにできない。宮中の時刻を知らせる鐘の音がどのくらいまで届いたのかは次の用例とも関連して興味ある事項である。

6 時奏するいみじうをかし。いみじう寒き夜中ばかりなど、こほこほとこほめき、沓すり来て、弦うち鳴らして、「何のなにがし。時丑三つ、子四つ」などはるかなる声に言ひて、時の杭さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑四つ」などぞ、里びたる人は言う。すべて、何も何も、ただ四つのみぞ杭にはさしける。（同書・二七一一段「時奏するいみじうをかし」）

ここには『春曙抄』に次のような注がついている。

是よのつねの時をうつ数子（ね）は九丑は八時なれば里人はさやうにいへど、禁中に時を奏し、時の杭をさすは、漏刻に従ひて何時も四づ、ばかり也と清少まさしく后宮にみやづかへして見き、たりし所をいへる詞也。里びたるとは里めきたる也。平人を里びたる人といふ也。延喜式陰陽寮云諸時撃鼓子午各九、丑未八、寅申七、卯酉六、辰戌五、巳亥四云々（春曙抄）

『春曙抄』も言うように、ここは清少納言が宮仕えをして知った、宮中と民間での時間が異なつた時空として捉えられていたことを鮮明に述べた場面である。「子九つ、丑八つなどぞ里びたる人はいふ。」とあり、詳細は明らかではないが恐らくは宮城から離れた人々には鼓の音が聞こえるはずもなく、そのように言い習わされていることを述べているのであろう。この一節は、清少納言の時刻の捉え方を知る上できわめて興味深い。宮中を律する定時法は帝の行動とともにある時間であり、それに対して日の出と日没を基とし、大まかな自然の運行に依る時間で暮らす人びとは住む世界が異なるという清少納言の信念を表し、また宮中という限定された空間に流れる特殊な時間に包まれている感覚は、厳しい現実を遮蔽する効果を生みだしているのではないか。その感覚を読みとることが、いくつかの章段ひいては『枕草子』全体の理解を深めると考えられる。『枕草子』という作品の存

在意義において時刻制度というものは想像以上に重要な装置になっているのだ。そのことをより明確にするために『子九つ、丑四つ』などぞ、里びたる人は言う。」の一節の「里びたる人」に注目してみよう。三卷本『枕草子』には「里ぶ」という動詞はここ一例だけだが、能因本には次のような例がある。

見知らぬ里び心地には、いかがはかかる人こそ世におはしまして、おどろかるまでへ宮にはじめてまゐりたる頃

(昭和四十九年版「日本古典文学全集」小学館)

意味はまだ宮仕えに馴れない作者が、定子に初めてお目にかかった折りの感想を述べた箇所であるが、高貴な場所には似つかわしくない自分自身を卑下して表現したところである。三卷本ではここは「里人心地」となっている。どちらが原意なのか、または作者自身による書き換えなのか簡単に判断を下せないが、「里人」でも意味はそれほど異ならない。しかし「里びたる人」となっても意味に違いはないだろうか。というのも、「里人」と言う言葉は「宮仕えをしていない人」、または実家の人と言う意味で使用されるが、「里ぶ」という動詞となると意味は変わるように思う。例えば『源氏物語』を見ると、動詞として用いられるものに次の三例が見出せる。

1 母君は、たゞいと若やかにおほどこにて、やはくとぞたをやぎ給へりし、これはけ高く、もてなしなどははづかしげに、よしめき給へり。筑紫を心にく、思なすに、みな見し人はさとびたるに心得がたくなむ、暮るれば、御堂に上りて、またの日もおこなひ暮らし給。

(新日本古典文学大系『源氏物語』二「玉鬘」・三五四―三五五頁)

「母君」とは夕顔のことで、筑紫に育ちながら母君に優る娘として育っている玉鬘のことを褒め称えている場面である。それに反して都人であったはずの玉鬘の乳母たちがあまりにも「さとびたる」、つまり田舎びてしまっていることに疑問の念を表明しているところである。

2 (薫)「佐野のわたりにいゑもあらなくに」など口ずさびて、里びたる簀子の端つ方にゐ給へり。(同五「東屋」・一七七頁)

ここは薫が浮舟の隠れ屋を訪れる場面で、「里びたる簀子」に対して『細流抄』は「たゞ山里びたるかりなるすのこなるべし」

と注を付けている。都では見られぬような粗末な「簀子」という意であろう。

3 宮（匂宮）は、御馬にてすこしとほく立ちたまへるに、里びたる声したる犬どもの出で来ての、しるもいとおそろしく、人少なに、いろあやしき御ありきなれば、すぐろならむ物の走り出で来たらむもいかさまにと、さぶらふかぎり心をぞまどはしける。

（同五「浮舟」一二五二頁）

ここは匂宮が浮舟に会うために宇治に赴く場面であり、屋敷の番犬に匂宮が吠えたてられているところである。お供は少数のお付きの者だけであり、ひどく怯えている様子である。新日本古典文学大系本にも指摘されているが、「犬」は『源氏物語』中にこの「浮舟」の二例だけしか見られない。つまり「里びたる声」というのは、都人が知る家畜化した犬ではなく、いまだ野生味を失っていない獐猛な野太い吠え声であったことを表現したものであろう。

これら三例の用例を見る限り、都に対する鄙のもの、一段劣ったもの、野卑なものという意味合いで使用されていることはほぼ間違いないといつてよい。してみると、『枕草子』の用例も「一段劣った人」という見下す意味合いで使用されていると考えてよいだろう。つまり宮廷に流れる定時法の中で暮らす人間から、大まかな自然時間である不定時法の中に暮らす「里びたる人」への優越感を見て取ることは間違ではない。そしてそれは同じ時間のなかで暮らす人々の自尊心と一体感を生み出すことにもなったのだ。

三 「不定時法」と「定時法」について

ここで「不定時法」と「定時法」について簡単にまとめておく。「不定時法（自然時間）」は測時器械のなかった時代においておおまかな活動の目安として採用される自然時刻法である。人は明るい間は働き、夜になれば休息のために眠る。そこで日の出が活動を開始し、日没が活動を終息させる目安となる。しかし夏と冬で昼夜の長さが三時間以上の差が存在する。そこで「不定時法」は、世の中の仕組みが整うにつれて不具合が生じる。それに対して「定時法（時計時間）」は季節に関わらず時間が一定に整えられることで政治の効率化・能率化が計られ、社会を管理・統治していくうえでも重要な制度の一つとなった。そのうえ権力の普遍性を演出するにはまことに都合のよいものでもあった。祭事の厳格さを象徴する大内裏の門の開閉の時間厳守により、一年を通し規律正しく政治が行われることをアピールし、そのことで朝廷の権威は一層高められたに違いない。このような時刻

制度は『養老令』の注釈書である『令義解』や『令集解』などを見ればより明確になる。

漏刻博士二人。掌らむこと、守辰丁を率ゐて、漏刻の節を伺ふを掌る。守辰丁二十人。漏刻の節を伺ひ、時を以て鐘鼓を撃たむことを掌る。使部二十人。直丁三人。 (『令 卷第二 職員令第二 陰陽寮』日本思想大系『律令』岩波書店)

とあり、漏刻によつて時刻を知り、鐘鼓を鳴らして時を知らせていたことが判明するが、測時器械として発明された漏刻は、当時の最先端の科学技術でもあり、そこから生まれた定時法は権力を支える強力な呪術でもあった。こういう事実が背景にあつて、『枕草子』の作者の時刻制度に対する感覚も生まれてきたことになる。しかし作品中に表された時刻が定時法であるか不定時法であるかを見抜くことは、実はそう簡単ではない。『万葉集』に、

時守（ときもり）の打ち鳴す鼓（つづみ）数（よ）みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し

（卷十一 二六四一）

訳・時守の打ち鳴らす鼓を数えてみると、あなたがやって来る時刻になった。それなのに逢わないのも不思議なことだ。

時守＝陰陽寮の役人。守辰丁。

（多田一臣・訳注『万葉集全解』4）

右の歌の注に、「当時は定時法で、漏刻によつて時を計り、一日を十二時に分かち、一時を四刻に等分した。時は「鼓」（太鼓）で、時刻は鐘で刻限を告げた。」とある。しかし現代のように全ての人が時計を所持し、時間を共有できたわけではない。鐘や鼓の音響はその届く範囲に限りがあり、それが及ばないところでは不定時法を採用するしかないということは今まで述べてきたとおりである。

また同歌に対して「新日本古典文学大系」では「延喜式には「諸時に鼓を撃つこと、子午は各九下り、丑未は八下り、寅申は七下り、卯酉は六さがり、辰戌は五下がり、巳亥は四さがり。並びに平声。鐘は刻数に依る（陰陽寮）」と頭注に記される。

皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも

（卷四 六〇七）

訳・「皆の者よ、寝よ」と告げる鐘は打つようだが、あなたを思うと眠ることもできないことだ。

（多田・同書2）

多田氏は『鐘』は時の鐘であり、陰陽寮の時守の打つ亥の刻の四つ鐘。」と述べるが、新日本古典文学大系『万葉集一』は、

「鐘で時を知らせるのは寺院の鐘で、一日を六時に分けるが、昼を晨朝・日中・日没、夜を初夜・中夜・後夜に分ける。昼と夜に分けるので不定時法であり、四季により間隔は異なる。日葡辞書に「ネヨトノカネ 初夜に打ち鳴らす鐘」とある。奈良時代の「寝よとの鐘」の正確な時は不明。」とある。つまり歌の解釈に当たって両者は定時法と不定時法で対立していることになる。奈良時代と平安時代では必ずしも同じような時刻制度が維持されていたか今日でははっきりしない点もあるが、「定時法」を維持することは測時器機の精度を維持するという困難さが付きまとうことから、中世以降「定時法」は行われなくなり、「不定時法」の簡便さが広く世に行われていた。逆に平安時代において「定時法」は宮廷の特殊性、権力を構築するうえで重要な装置になっていたと考えられる。つまり帝、中宮を中心とするごく限定された空間には世俗の場とは異なる時間が流れ、そのような時刻制度に支えられて中国文化も一層輝きを増した。そこは彼女の生まれ育った「里」、つまり生家とは当然に別次元の場であり、宮仕えをすることによって初めて邂逅出来た驚嘆すべき空間であった。この宮廷という空間に清少納言が関わることは、一面彼女の持つ生れた自尊心を大いに満足させるものでもあったろう。しかも中宮定子への忠誠の心として、過去の栄光の日々を再構成し、この現実世界を再構築していくことが彼女にとつての重要な使命となっていた。そして中関白家の衰退という厳しい現実から逃避し、栄光の日々を永遠に持続させる装置こそが『枕草子』といわれるゆえんである。そのために彼女の意識に依る世界の構築が『枕草子』の重要な役目となったのである。だから凋落していく定子の一族の悲惨さを彼女が描かなかったことも、彼女自身による世界の再構成ということになる。世界を清少納言の意識のままに表現し直し、過去の栄華の日々をより一層華やかに紙面に留めることがこの作品の使命であるという観点から見れば、『枕草子』という作品の成立への新たな解釈が開かれるのではない。一刻でも現実の厳しさを忘れさせたいということは、しかし書く人間にとっては地獄の苦しみが伴った行為であったのではない。『枕草子』という作品を底の浅い人間の書きあげたものという紫式部の評は、かなりの外れなものであったといわざるを得ない。そうしてもう一度繰り返すことになるが、当時の時刻制度は清涼殿を中心とした朝廷と言う限定された次元にだけ存在したものであった。「大納言殿まあり給て、文のことなど奏し給に」の章段の話は、まずこの特殊な時間が流れる空間で起こったことに意味がある。それは日本の他のどこにも存在しない「時空」なのである。そしてそこに一条天皇、中宮定子、伊周という当代最高の人物が揃い、中国文化が横溢する空間をファンタスティックに演出する上で欠かせないものであった。最初の話に戻るなら、彼女は決して新参であるが故にこの場に取り残されたのであるはずがない。それは中関白家につながる者にしか許されない奇跡的な「時空」に遭遇できた幸運を、彼女の感覚で切り取った一瞬であり、中関白家の輝かしい日々を記録したものであった。現実を描いているように見せかけながらも「清少納言」というきわめて個性的な人格が、新たに再編集した虚構の世界を描いているのである。そういう営為の内に生み出された作品が『枕草子』という作品である。当然それ

は随想というよりも、創作につながる行為であるといっても過言ではないだろう。

四 最後に

前節までに延べてきたことで、「大納言殿まゐり給て、文のことなど奏し給に」の段の登場人物、帝・中宮・伊周という当代最高の人々が存在する至高の空間、その場に生き生きとやり取りされる中国文化という教養、そしてそのすべては宮中にのみ流れる特殊な時刻制度によって保障され、一層輝きを増すように構成されているということを論じてきた。実はこの論考の論証のために平安朝期の作品『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『宇津保物語』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『更級日記』『源氏物語』『栄華物語』『大鏡』『狭衣物語』の十一作品中に現われる、全一四五例の時刻に関する記述を調査し、それが定時法と不定時法のどちらで用いられているのかを分析してみた。その調査内容については紙数があまりに膨大になってしまったので詳細については機会を改めたいと思っている。ただその調査の過程で、『源氏物語』にある十五例の時刻に関する記述はなかなか興味深いものであった。それはその十五例がほとんど宮中・六条院・須磨に集中していることである。そして定時法によって覆われ区別される「空間」がはっきりと限定されている。中でも特に印象的な例があり、それは『源氏物語』の次の一節である。場面は「夕顔」巻で光源氏が物の怪に襲われるところで、

このかう申す物は、滝口なりければ、弓弦いときぐしく打ち鳴らして、「火あやふし」と言うく預りが曹司の方に往ぬなり。内をおぼしやりて、名対面は過ぎぬらん、滝口の宿直申しいまこそ、とおしはかり給は、まだいたう更けぬにこそは。

（藤井貞和校注 新日本古典文学大系『源氏物語』一「夕顔」一二三頁）

源氏が「なにがしの院」に夕顔を伴い、物の怪に襲われ心細くなって宮中を想起する場面である。源氏は特殊な時間によって規律ある運営が行われる宮中と、大まかな非文化的な時間の流れの中に身を置かなければならない「なにがしの院」という異なる「時空」をするべく認識している場面である。作者の意識は、不定時法のなかでこそ魑魅魍魎の跋扈する空間が存在し、そこでは霊が力を持つことが可能なエリアと考えていたことが判明する。六条近辺にある「なにがしの院」という、宮中の威光（定時法）の及ばぬ場に孤立した源氏は、制度的な時刻制度が実効支配する空間を激しく渴望しているのである。この思想こそ『枕草子』の根底に流れる時間感覚と同質かそれ以上に精選された感覚といえよう。清少納言の描きたかったものは、目には見えない

ながら明らかに時間の恩寵に浴する優越感であった。『源氏物語』に内在する時間の観念と『枕草子』に描き出される時間の観念に両者共通するものがあるとすれば、それは時間によって截然と仕切られる貴の世界と、おおまかな感覚によって構成される俗の世界とはつきり区別する感覚である。ただし清少納言はそれが中関白家の人々と自分が共有できる至福の感覚であり、一般の人々に対する優越感につながっていた。一方紫式部にとっては合理的で合理的な世界の証しとしてこの時間感覚を捉えていたように思える。これは両者の立つ環境や資質がそういう違いを生み出したとも考えられる。このように平安朝の作品群を時間の観点から捉えなおすと、作品の内容に大きく関係しながら定時法・不定時法がその時々で使い分けられていることが明らかになる。しかし先にも述べたように中世に入ると定時法は宮廷世界から消滅していく。これは測時器械の維持がことのほか困難であったことが原因だともいわれるが、中世という時代を考える上で不定時法のみを採用したことが人々の内面世界にも影響を与えているように思われてならない。

現代のわれわれは同一の時間の中で生を送りそれを当然と考えているが、そのことが原因で平安時代の人々が意識していた時間の二重性について見落としがちなのではないだろうか。『枕草子』や『源氏物語』以外にも時刻制度というものがどのような影響を与えていたのか、興味深いところであるが今回は一応ここまででこの小論を終えることにする。